

イラストレイテッド 心電図を読む(改訂第2版) 鑑別に迷わないために

監修：杉浦哲朗（土佐市民病院 名誉院長・高知大学医学部 特任教授）

著者：土居忠文（高知医療支援研究所 所長） kik-doit@md.pikara.ne.jp

B5判、166頁、定価(3,400円＋税)

出版社：南江堂 2016年発刊

本書は、異常心電図波形と各種病態における心電図判読に重点をおき、不整脈と波形異常を分かりやすく解説し、心電図を学ぶための入門書としてまとめられています。まず、「刺激伝導系」や「心電図波形の形成」などの基礎的項目は、口絵にまとめられ、図を多用し分かりやすく解説しています。不整脈では各症例について、例えば洞頻脈であれば「洞頻脈とは」、「心電図所見」、「洞頻脈の波形と解説」、「鑑別診断としての波形と解説」の順にまとめられています。波形異常では、各症例について解説している他に、「右脚ブロック・左脚ブロックの波形の成り立ち」、「右房拡大・左房拡大におけるP波の変化」、「心筋の虚血・壊死と心電図波形」、「下壁梗塞をみる心電図誘導」などが図や波形を使って説明されています。最後に付録として、「アーチファクト」、「人為的ミス」、「血液循環と心疾患」についてまとめられています。本書に掲載されている図(波形を含む)は234に及びます。

イラストを多く用いて解説しているため大変分かりやすく、初心者が楽しく心電図を学習できるように工夫されています。とくに、不整脈の心電図波形と刺激伝導系との関係を示したイラストは、不整脈の発生部位や発生機序を理解するうえで大変参考になります。心電図の異常所見をまる覚えするのではなく、不整脈の判読に刺激伝導系を使って解く訓練ができ、スキルアップを現実のものとして習得できるものと思われまます。心電図の波形異常の判読では、各誘導の意味や、心臓をみる方向などが同時に示されており、心筋梗塞の部位診断などにおいても、まる覚えするのではなく、視覚的に理解できます。本書の大きな特徴は、心電図判読における鑑別診断も分かりやすく解説していることです。症例ごとの心電図波形とその所見の説明と同時に、鑑別しなけれ

ばならない心電図波形が説明されており、各症例を理解することと並行して、鑑別診断の関連付けを学ぶことができます。心電図検査の臨床現場のように、実践的に判読の訓練ができるようになっていきます。

本書を大学、専門学校等において教科書として使用する際、資料として、本書に掲載されていない49症例の12誘導心電図と、本書の図がスライドとしてパワーポイントで使用できる特典があります。本書に掲載されている症例以外に、12誘導心電図が付いてくことは、試験や補助資料として大いに活用できます。また、授業で図をスライドで示しながら進めることができ学生の理解度も向上することでしょう。

これまでも数多くの心電図関連の書物が出版されていますが、その多くは循環器専門医により書かれており、ややもすると専門的すぎて「心電図は難しい」という印象を受けることもありまました。本書の著者は医療現場だけでなく、本学にて非常勤講師として現在まで長く、学生に「心電図の読み方」を教えてこられ、医療と教育の場で活躍されている臨床検査技師です。また本書は長年にわたる生理検査の現場で培われた経験と、そして監修の循環器専門医の先生の指導がみごとに調和し作成されたものと、その内容からうかがえます。

私は臨床経験を経て教員となりましたが、医療現場で臨地実習生に教えるのとは違い、学内で学生に教えるには教材不足で、何かいい本がないか探していました。本書は、実践的な授業をする上で臨床検査技師を目指す学生の教科書として最適であり、また卒業後、臨床検査の現場でも活用できる良本であります。

(中村泰子：高知学園短期大学医療衛生学科
医療検査専攻 ynakamura@kochi-gc.ac.jp)